

誘惑物語はイエスがキリストとしての召命を受け、神の子であることについてどのように応答するかを神さまが試されたことに視点があります。「誘惑を受ける」と訳されている語の元来の意味は「試す、テストする」です。また、新共同訳では「荒れ野に行かれた」と、自動詞に訳されていますが、原文は受動態で、「荒野へと連れて行かれた」と、神さまが行ったこととして示しています。この物語において、イエスは悪魔の三つの誘惑を聖書、申命記の言葉を用いて退けています。申命記では荒れ野 40 年の旅はイスラエルの人たちが神さまの言葉に聴き従うかどうかを神さまが試された期間であるとされています。著者はイエスがユダヤの荒れ野で断食して祈り、そこで聖霊の働きを受けたという伝承を、イスラエルの人たちが 40 年荒れ野を旅した物語に重ね、自分たちが地上の旅で直面する誘惑と試練に対して神さまの言葉に聴き従うことによって克服すべきことをこの物語を通して語っているのです。三つの誘惑は私たちが日々の生活の中で受ける誘惑とはかなり違うものです。これが誘惑という前提には神の子イエスにはそれができるといふことがあります。

第一の誘惑をイエスは『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』と書いてある』と言って退けました。この言葉は、パンなど、現世の利益を追及してはならない、物質的な・外面的なものではなく、神さまの言葉をこそ求めて生きなさい、と言っているではありません。イエスは「神さまはあなたがたにパン、生きるのに必要なものを備えて下さる、それは恵みだ。しかし神さまの恵みはそれに尽きるのではなく、神さまはそのことを通してもっと大きな恵み、神さまの口から出る一つ一つの言葉によってあなたがたを生かし、導くという恵み、を与えようとしている、私はその恵みを与えるキリストとしてこの世に来た、それゆえに、石をパンに変えて与えるということはない」と言った、と記しているのです。

三つの誘惑はいずれも「あなたには、わたしの他に神があってはならない」という第一戒をめぐむものであることが分かります。私たちも地上の歩みの中でたえず誘惑(自己の欲望の充足、自分の栄光、他者を支配する力)に曝されています。この誘惑に対して、私たちはイエスにおいて現された神だけを神さまとし、この神さまに自己を委ねることで克服するのです。

「神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」。それは神さまとの交わりによって生きるということです。神さまが私たちに言葉を語りかけ、私たちがそれを聞き、その言葉を信頼し、その言葉に応じて生きる、そのような呼応関係が神さまとの交わりなのです。

受難節を過ごすことは、ある意味で自分を荒れ野に置いてみることに言えるかもしれません。そこからもう一度、神さまとの繋がり、人との繋がりを見つめ直してみるのです。